

# 災害にあうとはどういう現実か？ －被災者から見た 2000 年 9 月東海豪雨－

岡田 洋司

(愛知学泉大学コミュニティ政策学部)

## はじめに

2000（平成 12）年 9 月 11 日の深夜から翌 12 日明け方にかけて、おりからの台風 14 号に刺激された秋雨前線は、愛知県を中心とする東海地方に記録的な豪雨をもたらした。

愛知県では、とくに名古屋市と西春日井郡で新川・庄内川等の河川が氾濫し、西春日井郡西枇杷島町・新川町、および名古屋市西区・北区・天白区等で合計 5 万 5000 戸ほどが床下・床上浸水の被害を受けた。また愛知県全体では、51 名の死傷者が出た<sup>1</sup>。

この水害については、多くの報告書や研究があり、地域防災、ボランティア、災害時の行動・意識等、さまざまなかたちで実態が解明され、問題点・課題が指摘されている<sup>2</sup>。それにたいして本稿は、それ以前の問題として、被災者の立場から、①水害に際してどのようなことがおき、②被災者がどのような意識をもち、③どのような問題に直面したのかを、あきらかにするものである。

筆者はこの水害の被災者である。しかも、堤防の決壊した場所からわずか 800 ｍ離れただけの場所で、床上 1.2 メートル以上の浸水であったから、この水害のなかでは大きな被害を受けた部類に属すると思われる。

この水害は、客観的に見れば、毎年のようにおきる“ごくありふれた災害”であったかもしれない。しかも、9 月 11 日といえば、翌年、ニューヨークで同時テロがおきたため、

そちらの記憶に隠れてしまっている。しかし、この水害は 4 年以上を経た現在にいたるまで私の生活、あるいは精神に後遺症を残しているし、それは地域の人びとも同様である。さらに同種の災害はその後も頻発している。そこで、私がこの水害で体験したことを、文章として残し、その意味を被災者の立場から検討することも、一つの意味がないわけではないと思う。

一般論であるが、災害をめぐる報告書・研究は、報告する側・研究する側が、当然ながらある種のパラダイム・思考の枠組みをもち、それによって報告・研究の視覚を導き出し、災害という現象を把握しようとする。それは、当然のことではある。しかし、場合によっては、被災者の状況とのずれをもつ。その意味で、本稿は、被災者という立場から、しかも“私”という立場にこだわることによって、行政の側、また研究者の側の災害、また防災についての視角をより実効性のあるものとする一助にしたい<sup>3</sup>。

## 註

- (1) 建設省中部地方建設局『中部の水害 2000 年 9 月東海豪雨』（同局、2001 年）。
- (2) この水害に関しては、管見の範囲でも関係の市町村のほかさまざまな研究機関による調査書がある。とくに群馬大学片田研究室編『平成 12 年 9

月 東海豪雨災害に関する実態調査』(2001年)は、京都大学防災研究所巨大災害センター・関西学院大学社会学部立木研究室等による共同研究の成果をまとめたもので、災害時の住民の行動・意識についての詳細な報告である。本稿の立場を相対化・客観化するために参照した(以下、文中では片田研究室報告書と略す)。また、中田實・光岡彩・保田正毅・加藤千恵子・山崎丈夫「地域防災におけるコミュニティと行政—愛知県西枇杷島町の水害から学ぶ—」

(『コミュニティ政策研究』第5号、2003年3月)、災害ハンドブック編集委員会編『被災地社協からの提案 東海豪雨水害』(社会福祉法人新川町社会福祉協議会、2001年3月)等は、より積極的な提言をおこなっている。

(3) そのため、本稿は、論文としては異例であるが、通常の論文の体裁をとらず、ある程度の客観化・相対化をおこないつつも、あえて“私”を主語として、叙述していきたい。

## I 水害の“現場”

### 1. 水につかるまで

私の居住する名古屋市西区なかおたい中小田井は、名古屋市の北西部にあり、名古屋市北部から伊勢湾にかけて流れる一級河川庄内川とその支流である新川の二つの河川にはさまれている地域である。もともとは西春日井郡であり、1960年代あたりまで農村地帯であったが、現在は住宅・工場・商店などからなる地域となっている。最近はマンション等も多い。中央部分を名鉄犬山線が南北にとおり、名鉄新名

古屋までは10分程度の場所である。

この地域の西側を南北に流れる庄内川は、歴史的に見ても、この地域に何度も水害をもたらした。とくに幕藩体制期においては、この川の両岸では堤防の高さが変えてあり、それが水害をもたらすことになった。すなわち庄内川の左岸は尾張徳川家の城下町である名古屋であったため、そちらに水がいかないように名古屋側の堤防が高くなっていた。その結果庄内川の増水により、つねに小田井側の堤防が決壊することになったのである<sup>1</sup>。しかも、この堤防工事にかり出されたのは、小田井の農民であって、彼らは当然、この工事＝夫役には力が入らない。そのため「小田井人足」というのは、怠け者の代名詞になったのである。ある意味では近世から水については因縁のある地域である。

私は、この地域に今から40年ほど前から居住しているが、被災当時の私の家族状況は、私を基準として、次のとおりであった(いずれも当時の年齢、状況である)。

父親 79歳 無職 脳梗塞により要介護1度。(2004年1月死亡)

母親 77歳 無職 病氣入院中。したがって水害中は不在。(2001年10月死亡)

叔母 69歳 無職 父の妹。父の世話のためしばらく同居。

本人 51歳 教員

いささか変則的な家族構成である。このほかにイヌ・ネコが1匹ずついた。これが前提である。

以下、被災にいたる過程と、被災から数日の状況を、私の『被災日誌』<sup>2</sup>により再現しつつ、コメントを加えるかたちで再現してみたい。

2000年9月11日（月）

豊田市鴛鴦町の区民会館＝公民館で愛知県史の史料調査。5時頃に終わり、東名高速道・東名阪高速道を乗り継いで帰宅。途中、雨がひどくなる。山田西インターを出る。下道の県道302号線の名鉄上小田井駅あたりで20～30センチの冠水がある。ブレーキの効きが悪くなる。家の前は30センチほどの水。しかたなく名鉄中小田井駅のガードの下にとめ、そこから歩いて帰宅。

この時期は、秋セメスター（秋学期）が開始される直前であり、私は、連日、県内外での資料調査等研究活動をおこなっていた。この日は、新聞の休刊日にあたっていたため、新聞の天気予報は見えていない。また、前日も日曜日であったため、新聞の天気予報は、前日の朝刊のものしかない。私についていえば、テレビ等の天気予報はあったにしても、新聞では最新の天気予報を見ることができなかったことが、豪雨への警戒心をにぶらせたのかもしれない<sup>3</sup>。

夜中に目が覚める。時計を見ると午前2時過ぎ。外で「こちらは中小田井消防団です。避難勧告が出ました…」という声がした。あわてて二階の寝室から階下におりる。叔母も目を覚ましていた。家の外を見ると、もう水は床すれすれまで来ており、水が入ってくるのは時間の問題。要介護1度の父をつれて避難することは無理。父とイヌ・ネコを二階に避難させ、いくつかのものを二階にあげる。通帳や保険の証書類と、仕事用のかばん、それにイヌ・ネコのエサ。人間は1日2日は我慢できようが、イヌ・ネコはそうはいくまい。足手まといになってほしくないという気持ちである。

しかし、水は見る間に上がってきた。決して凶暴な感じではないが、スーッと静かに上がってきた。スピーカー等のオーディオ製品や書籍等が見る見るうちに水に漬かるのを、現実とは思えない気持ちで、なんとなくボーっとして見ていた。1週間ほど前に購入したパソコンを二階にあげたところで停電。あとは、記憶にない。そのまま自分の寝室で寝てしまったらしい。

以上のようなかたちで、我が家、また私の住んでいる地域は水害に襲われた。その際、私は避難せずに、自分の家にとどまった。すでに水があふれ、足の不自由な高齢者二人をつれて800メートルほど離れた避難所（名古屋市立中小田井小学校）に避難することは無理と判断したからである。ようは逃げ遅れたのである。ただ、①家は二階建てだが、中二階があり、二階は実質的に普通の三階に近いこと、②中二階の倉庫に携帯用のコンロ等があったこと等の理由があり、何とかなるだろうという気持ちであった。そもそも、水が漬かる瞬間にはそのことの意味についての実感がなかった。人間とつさの場合には、その意味が十分に把握できるとは限らないということであらうか。

## 2. 水の中での孤立から水が引くまで

あくる日の新聞は、「洪水 竜巻 交通マヒ」（『中日新聞』2000年9月12日朝刊）、「東海で豪雨 避難勧告4万人超す」（『朝日新聞』同日）と報じたらしい（この段階では、まだ水害の全容は把握されていない）。

私の一家は、知らず知らずのあいだに寝てしまった（呑気？疲労？）。記憶は、夜明け頃からはじまっている。

9月12日（火）

朝5時頃の記憶。とにかく家の周りは一面的な水。向かいのTさんの家のクルマが完全に屋根まで隠れている。やっと大変なことになったという実感がわく。大きなポリバケツや板等がゆっくりと流れ、家の庭に入り込んでくる。また油も浮いている。階段を覗くと、下の方がかなり水に漬かっている。

空腹。中二階にあった携帯コンロやクラッカ一等を出し、台所までいって缶詰等をさがそうとする。階段の半ばまで水。夏の終わりの冷たいような生ぬるいような気持ち悪い泥水。階下にいって仰天、大きなテーブルや机が浮いている。そのうえにイスなどがのっている。冷蔵庫も倒れている。なかば浮いたのだろうか。ともかく台所で缶詰を拾う。炊飯ジャーが浮いていた。なかを見ると無事。また、ありがたいことに二階にトイレがあり、水道が出る。

次の日は早朝に目覚めた（その後、2月ほどはかならず早朝に目覚めた）。時間が経ったことで、また、周囲が明るくなったことで事態の深刻さを実感できるようになったのであろう。とくに階下においていて、水害の実態を見ることでそうした深刻さの実感は強まる。逆に二階にトイレがあり、水道という重要なライフラインが無事だということを発見したことは大きな救いであった。ただ、水道については不安であったため、基本的には、非常用備蓄のペットボトル飲料を飲むことにした。

二階のベランダから外を見る。向かいのTさん、隣のKさんも外を見ている。電話は水没して使えない。携帯がかからない。故障か？ラジオの情報は一般的なことしかいっていな

い。孤立感が強くなる。

夜、仏壇のろうそくを何本も燃やしあかりをとる。水が出ることと自分の寝室は普段と変わらないことが大きな大きな救い。暑くあけっぱなしで寝る。

その日は、ひたすら待つことで過ぎた。ラジオで情報を集めようとした。しかし、たいした情報はない。携帯電話で連絡をとろうとしたがかからない。それまで比較的平然としていたのは、朝になったらあちこちに携帯をかければいいと思っていたからである。ところが、携帯がかからない。故障かと思い、一度に不安になった<sup>4</sup>。同時にラジオの電池が心配で、電池を節約することをいろいろ考えた。仏壇のろうそくもそのひとつであったが、意外に長持ちするし、明るいといえば明るい。これは役に立った。

9月13日（水）

被災も2日目に入る。この日は、焦りから、もっとも精神的にまいった、かつ長い一日であった。

5時頃に目覚める。水はどうなったか。真っ先に見る。全く変わっていない。落胆する。

ラジオは、一般聴取者向けの一般的な情報しか流していない。「避難勧告が出たにもかかわらず、取り残されたが人おり…」。「取り残された」側としては、助けにくるのかこないのか、食料はいつくるのか、いつ水が引くのか、携帯はなぜ通じないのかという切実なことを知りたい。被災者が本当に必要な情報をあたえるような放送はできないのか。朝からヘリコプターが飛んでいる。しつこくしつこく同じところをまわり、バタバタバタバタ…とやたらうるさい。そのくせ何もしてくれな

い。人の神経を逆なです。叔母もいらだつ。近所中いらだっている。

少し状況が動き出した感じがした。ヘリコプター等も飛び回っていた。しかし、こちらが必要とする情報はほとんどなくかなりいらだっていた。とくに報道関係と思われるヘリコプターが、しつこく同じ箇所を旋回し、神経を逆なでされた。それは私一人ではなかった。この日の昼頃から夕方頃までが、水の中に閉じ込められ、頼みの携帯も通じず、情報もなく、ヘリコプターがうるさく神経的にまいった時期だ。

3 時頃、胸まで水に漬かりながら、歩いてきた人がある。近所の U さん。今まで、避難所の中小田井小学校にいたという。避難所は食料もなくひどい状態で帰ってきたという。

4 時頃ボートが家の前に着く。見知らぬ男の人が漕ぎ、女の人のがのっている。向かいの T さんの娘さんで、近所のマンションからお母さんの様子を見にきたという。おかげでいくつかの情報が入った。自衛隊等がボートで救出しているという。となりの K さんはもう食べ物がなく、避難所にいきたいと朝 6 時に通りがかりのボートに頼んだが、なしのつぶて。うちも父を逃がしたいので連絡を頼む〔そして現実には K さんには迎えがきたが、うちは無視された〕。

このやりとりをめぐって T さん・I さん・K さんと二階のベランダ越しに大声で話しながら、情報交換。I さんの息子さんに携帯の件を聞くと、やはり通じないとのこと。自分の携帯の故障でないことだけはわかり、やや安心。こうして近所同志が話すことで、気持ちが楽になる。

以上は、私に即した避難しない場合の状況である。当然、避難勧告をきいて近くの避難所へ避難した人たちも多かった。また、高架になっている名鉄中小田井駅に避難した人たちもいたという。13 日あたりになっても、県内で約 2 万人が避難生活を送っていた。その状況は、「夕食といっても乾パン三個とわずかな水。子供と年寄りにはパンやおにぎりが一つずつ配られた（『中日新聞』9 月 13 日夕刊）」という状況であつたらしい。

前掲片岡研究室報告書によれば、避難所に避難した人全体で、食料類の不足を感じた人は 88.9 名、毛布などの不足を感じた人は 50.4 名におよんでいる。また、この報告書には次のような被災者のさまざまな不満の声がのっている。

水害の情報、行政が具体的にどのような対策をしているのか、何も知らされず自宅がどのようなになっているのかも、テレビも設置（その時は電気はまだついていた）されていなかった。避難場所である以上、電気が切れても明かりはつくようにしてほしい。真っ暗の中にいた。恐かった。（西枇杷島町：52 才女性）

毛布、非常食の配り方に問題あり。とりあい状態で 1 人でいくつもとりこむ。電気が止まり、トイレの水がでなくなってながせなくなった。〔中略〕ペットをつれてくる人が多く、自分たちの食料もろくにないのにカンパンなどを食べさせていた。又、排泄物などもろくかでさせたりひどい人は教室内でさせていた。我が子はアレルギーでたいへん迷惑であった。（西枇杷島町：42 才女性）

トイレがすごく汚くて、困った。〔以下略〕

（西枇杷島町：36 才女性）

知らない人と寝起きを共にするのは苦痛に

感じる。夜ほとんど眠れなかった。（西区：46才男性）

誤解にもとづく感想もある。ないものねだりもある。また最後の感想のように、“非常”の際であることの認識が弱いのではないかとも思える感想もある。しかし、避難所がさまざまな問題をかかえていたことは間違いがない。とくに、ある程度の情報をもち、全体が見渡せる第三者から見れば、被災者が必要以上の危機感・不安感をもっていたように見えるかもしれないが、前述のように、とりわけ12日段階では地域に即した情報がないなかでは、被災者の不安は際限なく拡大していったのである<sup>5</sup>。

## 註

- (1) この地域の歴史については編纂委員会『西枇杷島町史』正（西枇杷島町、1964年）等がある。
- (2) この『被災日誌』は、水害中につけていたメモにより、2、3か月のちに文章化したものである。したがって正確に言えば日誌ではなく、文章化した時点からの記述になっている。また、今回、引用するにあたって、他人が読むのにわかりにくい部分には、基本的には註ではなくやや説明的な文章等を補ってある（例：K建設→この家を施工したK建設）。また、ごくプライベートな部分は省略した。なお、被災と復興の真っ最中になぜこのようなメモを残したかという、精神的なバランスをとるためというほかはない。
- (3) 10日朝の段階での天気予報は、「10日朝、志摩半島以南で降り出す雨が

夕方には東海地方南部まで広がる。夜は本降りになりそう」（『中日新聞』9月10日朝刊）というものであった。

- (4) 当時はもちろん携帯は相当に普及していたが、災害時には携帯は通じなくなるといった情報は知られていなかったと思う。
- (5) なお、念のためにいえば、以上の記述は避難所の意味を不当に軽んじ、避難所に逃げるのが危険だという主張をするためのものではない。

## Ⅱ 水が引いたらどうなっていたか—惨状への直面

災害から3日たった9月14日には、私の地域の水はいちおう引いた。それは、大げさではなく、待ちに待ったものであった。しかし、むしろここから水害にあったという現実がはじまったのである。ここで、私たちははじめて水害の惨状へ向きあうことになった。

9月14日（木）

水はほんの少し引いたようだ。Tさんのクルマの屋根が見えかかっている。そして、昼前から徐々に、だが確実に水が引きはじめた。

昼前に隣の印刷会社のKさんとTさんがゴムボートであられる。おにぎり等の差し入れ。工場の機械・紙は全滅だという。

みんな、水のなかを歩きはじめた。まだ水は腰まである。駅前においたクルマのことが気になり、中小田井駅まで歩く。みんな短パンにゴム草履。でも不用心な気がして、長ズボンに靴。どうせぬれるけれど肌を出さないほうが安全なような気がした。

家から数100メートル歩くと水がほぼなくなる。ただし信号は電気がつかず、クルマが

のろのろと運転している。両側に路駐したクルマがそのままだめになっている。

クルマはやはりだめだった。屋根近くまで水がきた痕跡があり、ドアをあけるとむっとした臭いにおい。エンジンをかけるなど注意されてきたけれど、エンジンをかけるまでもない。

昼過ぎ、従妹のY子〔同居していた叔母の娘〕が水のなかをあらわれる。そして、父をとりあえずここからあまり遠くない別の叔母の家までつれていこうという。先ほどのKさんにゴムボートを借り、紐をひっぱりながら通りを歩く。水がきていない場所までいき、そこでクルマに乗り換え、父と叔母を避難させる。〔中略〕

夕方、叔母と従妹が戻ってくる。イヌもネコもつれて守山区の叔母の家にいこうという。途中、父のケアマネジャーのKさんの薬局をとおる。ここもかなりひどい。最初に父が避難した叔母の家で夕食をとり、守山の叔母の家へいく。

水が引きはじめると、それを待ちかねた（本当に待ちかねたのである）人びとは一気に動きはじめた。私の家の場合は、これを機会に叔母の家に避難し、そこから毎日通うかたちで復興生活に入った。毎日、かたづけをしてから、名鉄と地下鉄・バスを乗りついで1時間以上かかる叔母の家まで帰るのは大変であったが、食事・風呂等の心配がなく、復興のことだけを考えればよかったのは心底からありがたかった。

#### 9月15日（金）

家財道具、食器、衣類、書籍・史料、LP・CD等が散乱している部屋。何から手をつけてよいのかわからない。なかば放心状態。と

りあえず床に水を流し、本等をひろう。何度やっても泥水。

昼過ぎに、亡妻の高校の後輩のFさんがやってくる。心配で今住んでいる津島からやってきたとのこと。本当にありがたかった。また、父の会社でつきあいがあったNさん一家が手伝ってくれる。これも本当にありがたい。

この家を施工したK建設がくる。壁のなかやフローリングの下に断熱材が入っており、それが水を吸っている。今はいいけれど、いずれ膨れ上がってくるので、床・壁を剥がして、ようするに一階は作り直すしかしかたがないとのこと。でも資金は？

大学のY先生が手伝いにきてくださる。この日、大学からはいろいろな人が様子を見にきてくださる。夜、高校時代からの友人Aに連絡。状況を伝えると、びっくりしてすぐに友人たちの支援体制をつくることを約束してくれる。

この日、家で片づけをはじめたときは、本当にどうしてよいのかわからなかった。とくに最初は自分一人しかいなかったもので、ほとんど絶望的な気持ちになった。そうしたとき、FさんとNさん父子が手伝ってくださって、やっと生きた心地がした。それによって、気を取りなおし、あちらこちらに復旧作業をお願いすることができた。個々の家によって状況は違うが、こちらからお願いしないことには、始まらないだろうと思う。

#### 9月16日（土）

本格的な作業の開始であるが、省略。

#### 9月17日（日）

今日は高校の同級生たちや職場関係者が10人以上きてくれた。さすがに大勢いるとはか

どる。まず、食器棚・洋服ダンス・ベッド・机等の大きな家具(の残骸)を運び出す。そして、衣類・書籍等も。たちまち道路の両脇に「粗大ごみ」がうずたかく積み上げられる(写真1)。うちは人数が多いのではかどる。人手の少ないところへ手伝いにいく。

市の粗大ごみ回収車が何台も何台も出入りする。しかし、どの家もごみが多いのか、なかなか自分の家にまではこない。そして、最初の回収車がきて、回収がはじまる。皆で回収車に文字通り放り込む(写真2)。バリバリと音がして、タンス等が砕けていく。たまらない気持ちとなる。この日に電気が復旧。



(写真1)



(写真2)

### Ⅲ. 復興活動と被害の実態

水害から1週間近くが経過し、ともかくも以上のようなかたちで復興がはじまった。それ以降の動きを簡単に記しておく。

9月18日(月) 保険の手続き等の書類を出しにいく。

なお、この日からはレンタカーを、親戚に無理をいって借りる(一応、クルマの購入はきめたが、まだ間にあわない)<sup>1</sup>。1日7000円になるが、クルマがなくては、復興活動もできず、思い切って借りる。その後、人から軽自動車を借りることができた。

10月1日(日) 父を残して、叔母の家を引き払う。

9月20日(水) この日から大学の秋 Semester 一開始。水害後初めて出校。あちこちあいさつにまわる。今までの分の「特別休暇願」を出す。

10月2日(月) 家の改修開始。またこの頃から給湯器・冷蔵庫・エアコン等を修理する一方、当面必要なものを購入する。11月半ばに家の改修完成 年内に、ほぼ以前の生活にもどる。

それでは、この水害によって私の家は、物質的にはどのような被害を受けたのであろうか。いささか煩雑であるが、私の家の物的被害を一覧表にしておく(次ページ)。

仕事から書籍等が多いこと、40年来の趣味であるCD・LPが多いことをのぞけば、家財の内容は一般的であろう。いずれにせよ、これらのすべてをもとにもどすには膨大な資金が必要である。

10月2日の『中日新聞』に西枇杷島町のある一家の被害状況調査が掲載されている<sup>3</sup>。この記事によれば、この会社員加藤さん(仮名)



災害にあうとはどういう現実か？（岡田）

一家（47歳・夫婦子供二人）は、水害で大きな被害を受け、冷蔵庫・食器棚・電子レンジ・子供の学習机・ミシン・ガス給湯器・畳・テ

レビ・ビデオ・鏡台・軽自動車（2台）等を購入し（一部予定）、その合計は約300万になるという。

わが家の被害一覧表

被害にあったもの		処理の方法と結果 <sup>2</sup>
自動車等	自動車（中型セダン） 自転車	廃車 洗って一部部品をかせ、使用可能。現在も使用。
家本体	一階の全体 庭	壁紙・石膏ボード・断熱材をとり、つくり直す。 フローリング・断熱材をとり全部つくり直す。 修理して使用可能。現在も使用。 泥がかぶったため、すべて取り去った。
電気器具ほか	冷蔵庫 洗濯機 電子レンジ トースター グリル テレビ オーディオ製品 エアコン アイロン ラジ・カセ 扇風機	修理して使用可能。現在も使用。 修理して使用可能。現在も使用。 修理して使用可能。現在も使用。 洗って使用可能。現在も使用。 洗って使用可能。現在も使用。 廃棄。 廃棄。 修理して使用可能。現在も使用。 洗ってそのまま使用可能。その後、廃棄。 廃棄。 廃棄。洗って分解すれば使用可能であったかもしれないが、そこまで手がかけられなかった。 廃棄。
家具	オイル・ヒーター 目覚まし時計 ソファ 食卓 椅子 ベッド 洋服ダンス カーペット カーテン類	そのまま使えるものもあったが、ダメなものもあった。 布張りのものは泥だらけで、廃棄。 合成皮革のものは洗って乾かして使用可能。現在も使用。 洗って乾かして使用可能。ややそりがあるものの現在も使用。 布張りのものは廃棄、木製のものは洗って使用。現在も使用。 マットが水を吸い使用できない。廃棄。 合板部分がばらばらになり、廃棄。 泥水をかぶり、廃棄。 クリーニングに出し、現在も使用。
台所関係	流し台 食器棚 食器・包丁・ナイフ等	合板部分がだめになり廃棄。 合板を使用したものは、ばらばらになった。上質のものは修理に出し、現在も使用。 食器の一部は、家具が倒れたときの衝撃で割れる。ほかは洗って使用可能。ほとんど現在も使用。
衣類・布団他		布団は泥水を吸ってほどこすすべなし。衣類も汚れの少ないものだけ洗って、使用。靴もすべて廃棄。
その他	書籍 ビデオ LP アルバム・写真	ごく一部のほかは、廃棄。とくに美術書は、水を吸って固くなり本棚から出なくなった。それをドリルで崩しながら出した。大切に高価な書物を集めた立場からはなんとも情けない。 すべて廃棄。 LPは溝の中に泥が入りすべて廃棄。CDは、CD自体は基本的には無事。ただし、数100枚のうち10枚ほどが水に漬かるうちに気泡が入り再生不可能になった。 早い時期に対応すれば、方法はあったらしいが、写真同士がくっついて、ほとんどすべてがだめになった。 そのため、“思い出”はほとんどなくなった。翌年10月の母親の葬儀に際しても、遺影となる写真がなかった。

あるいは名古屋市北区楠西学区の 119 軒の調査によれば、被害の合計は 899 万円に達したという（家屋 261 万円・家財 226 万円・自動車 183 万円他）<sup>4</sup>。

ただ被害という点からいえば、以上の金銭的被害もさることながら、時間・手間といった目に見えにくい被害もきわめて大きい。10 月から年内いっぱいにかけては、保険の手続き、最低限の家具・電化製品の購入、お礼のあいさつ等に忙殺された。そうした日々にも仕事、また母親の見舞い、父親の世話等はこなさなくてはならず、精神的にも肉体的にも疲労困憊の極みに達した。重いものをもったせいか、腰痛もおきた。毎日、家に帰っても、玄関に倒れこみ、寝室のある 2 階まであがる気力がない日々が、1 月以上つづいた。また、災害以後、体は疲労しているが、神経が高ぶり 4-5 時間しか眠れなくなった。

#### 註

- (1) なお、この水害で冠水したクルマは名古屋市周辺を中心に 1 万台近く（『中日新聞』9 月 14 日朝刊）だという。それにたいしてレンタカーは会社関係が長期で借り切ってしまう。高いレンタル料を覚悟しても個人が借りることが難しかった。
- (2) 私の家では、表のような状況であったが、修理ができるかできないかは、個々の家庭でかなり差があったようである。大雑把に言えば、電子部品が入ったものはほとんどがだめで、単純なものは使用可能であったようである。なお、多くのメーカーは特別の料金で対応してくれた。
- (3) 「重い復旧費 300 万円」（『中日新聞』

2000 年 10 月 2 日夕刊）。

- (4) 「平成 12 年 9 月東海集中豪雨災害楠西学区の災害報告」。調査方法などのデータがなく、厳密性にはかけるが大体の状況はうかがうことはできよう。

#### IV 若干の感想等

以上のようなかたちで、私の一家は水害にあい、かつ何とか復興をおこなうことができた。その過程で私はいろいろなことを見聞きし、経験し、さまざまな感想をもった。最後にその一端を書いておきたい。

##### ①「情報」の問題

水のなかに閉じ込められているとき、私の一家がもっとも欲しかったのは「情報」（それも一般的なものではなく、水のなかに取り残されたという状態に耐えるための）であった。十分な情報がない限りは、不安が被災者をおそい、その不安は際限なく拡大していく。前述の西枇杷島町の被災者たちの不安・不満も、それを前提に考えなければならない。「避難勧告が出たにもかかわらず、取り残されたが人おり…」という NHK の放送を聴いたとき、私は、困難な状況にある私たち被災者は、彼らが語りかける対象とはみなされていないことを痛切に感じた。いささか感情的な物言いかもしれないが、災害報道は要するに安全なお茶の間でテレビを見ている人のためのものなのである（もちろんそれが不用であるなどといっているわけではない）。前述のヘリコプターに私たち家族や近所の人びとが憎悪をおぼえるほどいらだったのは、私たち被災者は単なる取材の対象で しかなかっ

たからである。直接、被災者に語りかけ、正しい情報をあたえ、勇気づける報道も、必要なものではなかろうか。「情報が一切なく、報道関係の人が無神経に聞きにくる」（西枇杷島町：41歳女性）（前掲片田研究室報告書）といった声はいくつも聞いた。

#### ②食料等の備蓄

私の家の場合、ある程度、食料・水の備蓄があったことが、本当に幸いであった。それがあったため何とか水が引くまでを耐えることができた。あたり前すぎて書く必要がないことではあろう。しかし、ぜひとも書いておきたい。

#### ③ボランティアの問題

この災害でも、多くのボランティアが復興の援助をした。しかし、私はボランティアの方々にお手伝いをほとんどお願いできなかった。

一般的にいて、被災者がボランティアを受け入れないのは、ボランティアというものになじみがなかったり、他人が自分の家に入ってくることへの警戒心であったり、といった理由で説明されることが多い。それはそれで正しいのであろうが、私から見れば、もっと単純な問題がある。少なくとも復興のもっとも初期の段階、被災の生々しい現場では、どこから手をつけたらいいのかが、もう少しいえば、どういうかたちで手をつけたら復興できるかが、呆然とした（さらにこの種の作業に慣れていない）被災者には見えない。それがない以上、場当たり的にその場で思いつくことしかお手伝いしていただけないのである。

ボランティアというものになじみがなかったり、他人が自分の家に入ってくることへの警戒心からボランティアを受け入れな

いと理由づけする人びとのかなりの部分は、多分、ボランティアの助けなしで、なんとか復興が可能なのである。この問題は、“もっとも弱い環”の立場にある被災者の実態に即した議論が必要である。

#### ④流言・うわさ

流言・うわさもいくつかあった。たとえば、今回は広範な地域が被害にあったので、保険も査定がきびしく、ほとんど保険金はおりにないだろうという類のものである。この種のうわさは、各家庭・事業所とも復興資金の調達が死活問題だっただけに、かなりこたえたはずである

そのほかにも、水害後2年半を経過してあきらかにされた、流言に関する次のような事実がある。これはぜひとも書き残しておく必要があろう。

00年9月の東海豪雨で被害続く最中に、名古屋市周辺のある被災地を「被差別部落と中傷する書き込みが繰り返し、インターネット上であることが分った。〔中略〕問題の書き込みがあったのは、豪雨が襲った9月11日から3日たった14日から15日にかけて。「〇〇（被災地名）へ行ってきました」と題したボランティア情報を交換する掲示板。最初の投稿者が「被災者の不平が目につく」と感想を書くと反応が相次いだ。問題部分を抜粋すると次のような書き込みが続いた。〈名古屋の人たち最低。もうほっとけばいいんじゃない〉〈不平をもらしている被災民は、名古屋市周辺部の人たちで市民はほとんどいません。〇〇一帯は…（略）〉こうしたやりとりの合間には、〈そうだったのか……〉と真に受けたり、〈〇〇は名古屋市民とは違います。名古屋市民と一緒にしないでください〉という反応もあった<sup>1</sup>

関東大震災のときの流言飛語の問題は過去の問題ではないと実感したような問題である。とりわけとうの昔に克服されてしかるべき被差別部落にたいする差別意識がインターネットという最新の媒体によって無邪気に垂れ流されていることが不気味以上である。

#### ⑤ペットの問題

当然、イヌ・ネコ等のペットたちも災害にあう。避難所にペットを連れていった人も多かったらしい（いっぽう、鎖につながれたまま水死したイヌの話もいくつか聞いた）。しかし、先ほどの西枇杷島町の避難所についての不満でもあがっていたように、それはトラブルの種になる。この点について何らかの社会的な合意が必要であろう。

#### 註

- (1) 「中傷・流言、東海豪雨時も」（『朝日新聞』2003年5月15日夕刊）。

#### おわりに

世紀がかわった翌2001年の春、決壊した付近の新川の砂州では、菜の花が咲き誇った。それは復興を象徴するようで美しかったが、今までないことであり、実際は水害による自然環境の変化をあらわすものであった。私の町内というわけではないが、被災地では、高齢者の何人かがいなくなったり、空き地ができたりした。災害を機に施設に入ったり、遠隔地の子供の家に移ったりしたのだという。これも災害の影響であるが、同時に高齢者のみでは暮らしにくいという現在の日本の地域社会のあり方の問題でもある。

水害＝災は、現在の地域がおかれた問題を一気に浮き彫りにしたともいえる。その意味

では、復興の問題は、個々の家庭・事業所だけではなく、地域という視点、また地域社会の再構築のなかで考えなくてはならない。防災ということでは、いわゆる「地域防災」にしても、それが独立して存在しているわけではなく、人間関係をふくめた地域社会のあり方全体への視野をふくめないことには一種の技術論になってしまう。そうした課題は限りなく大きく、抽象論におちこんでしまう危険性も大きい。水害後、4年以上がたち、私をふくめた人びとがともすれば、以前の日常にもどったことで満足しつつある現在、この「地域」という視点を強調しておきたい。

#### 付記

このようなものを活字として残すことにどれほどの意味があるのか、という気持ちは強い。また、今でもこうした体験を思い出すのはかなり苦痛である。しかし災害を身をもって体験したということと、地域社会のなかでコミュニティを形成することを課題とする「コミュニティ政策学」を学ぶという両面に身をおいたものの責任としてこのような文章を書いた。

また被災時には、直接間接に実に多くの人にお世話になりました。その時点には満足にお礼がいえませんでした。この場を借りて、あらためて心よりお礼申し上げます。

（2005年1月14日成稿）